
腕挫十字固－うでひしぎじゅうじがため－

河野 る宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

腕挫十字固一うでひしぎじゅうじがため一

【Nコード】

N9159R

【作者名】

河野 る宇

【あらすじ】

＊いや……なんでこうなったんでしょう？ 俺にもよく解りません。

※小説サイト「野いちご」にも投稿させていただいている作品です。

◆あなたの不運に乾杯

「んゝ良い気持ち」

その青年は駅から降りて伸びをした。青年の名は向井^{むかい} 時弥^{ときや}、170?と小柄だが鍛えている事が窺える。

ここは岡山の奥、観光客などまったく見かけない町——彼はここに住人ではない。

有名な温泉街も無ければ名所も無い。なのに何故、彼はここに…?

「ん?」

時弥は駅の近くに駐めてあるワゴンを少し覗いた。彼は好奇心が旺盛なのだ。本当に何の気無しに覗いただけに過ぎなかった。

覗いた刹那——「がっ!?!」

後頭部に衝撃が走りアスファルトに倒れ込んだ。

「おいっ見られたぞ!?!」

「とにかく縛り上げて積み込め」

「……っ」

俺まだ何にも見てなかったんだけどな……と考えながら時弥は意識を遠ざけた。

パーカーのフードを目深に被った男2人は周りをキョロキョロと窺いながら時弥の手足を縛り猿ぐつわをして彼の荷物を抱えてワゴンに詰め込んだ。

そして1人は運転席に、もう1人は意識のない時弥を見張るために一緒に後ろに乗って車を走らせる。

「どうすんだよこいつ」

「! おいっ」

時弥の服を調べていた男がサイフを取り出し、中に入っていたカードをバックミラーに映す。

「それなんだ……？」

運転している男はよく見えなくて目を細めて問いかける。

「自衛隊員の身分証明書だよ！」

「ええっ！？ 大丈夫なのかよ！？」

数秒、沈黙する2人……自分たちの運が悪いのだろうかという考えが過ぎったが、後部座席の男は大げさに頭を振って否定した。

「違うさ！ 捕まったこいつの運が悪いんだ」

「そ、そうか……そうだな」

カードをサイフに仕舞ってそのサイフをパーカーのポケットに突っ込んだ。

車はさらに山奥に入っていく。曲がりくねった坂道を登り舗装されていない脇道に入る。そこからさらにしばらく走らせ森の中に見えた赤い屋根の灰色の建物――

◆あなたの不運に乾杯（後書き）

＊見切り発車です。ええ、タイトルから想像して暴走すること間違いなし。

*ご対面

「！」

時弥ときやはハッと気がついて体が動かない事に眉をひそめる。パイプイスに両手を後ろ手に縛られていた。

「おい、おまえ！」

「！」

男の声に前を向く。

そこにいたのは3人の男性。時弥と同じ20代前半だと見受けられる。

「こんな処に何しに来たんだよ」

「何しにとって……ちよつとした旅行だよ」

「こんな田舎町にかよ」

「観光地は興味無いの」

ヒトの趣味をとやかく言わないでくれるかな……と時弥は心の中でブー垂れた。そうして周りを見回す。

どこかの倉庫跡のようで、時弥の両端に木製のパレットがうずたかく積まれていた。前に見えるのは入り口が開放たれたコンクリートの地面。

「君たちこそ、こんな田舎で何をしようとしてるんだい？」

「田舎って言うな！」

と自分で田舎と言った青年が声を張り上げた。

あ、俺が言っちゃだめなんだ……とその青年を見つめる。3人は3人とも草色のジャケットとカーゴパンツで揃えていた。

戦闘服をイメージしているのかな？ 時弥は冷静に青年たちを分析する。

「それで、目的は？」

時弥は改めて問いかけた。髪を茶色に染めた短髪の青年は少しおどおどする。

「うるせえ！ てめえには関係ねえからそこで大人しくしてな」

と両耳にピアスを付けた男が言い放ち出て行く。その後を2人が追ひ、時弥は1人残された。

「……」

普通、監視1人くらい置くもんじゃない？ などと考えながら後ろ手をもぞもぞ動かす。しかし思っているより頑丈に縛られているように、つちもさつちもいきそうになかった。

「はあゝ」

ガックリ肩を落として溜息を吐き出す。

すると――

「おい……」

「!？」

後ろから声をかけられパイプイスが少し動くほどビクリと反応した。

「……だれ？」

恐る恐る顔を後ろに向ける。

「しっ黙ってろ」

そこには、身を隠すようにして時弥の腕を縛っているロープを解きにかかっている男の顔。

「君は？」

問いかけた時ロープが解けた。手首をさすり立ち上がると、その男も立ち上がった。

「……」

ちよつとガツシリした顔つきだったが……なるほど、体格もガツシリしている。170?の時弥より15?ほどは高いと窺えた。歳は近そうだ。

「俺は向井 時弥」

「八尾 杜斗^{やおい もりと}」

ぶっきらぼうに発して気配を探り時弥を奥に促した。

2人はパレットの山の中に身を隠す。

「どうしてここに？」

声を殺して時弥が訊ねる。

「……あんたが車に詰め込まれてるのを見たんだよ」

この青年も時弥と同じようにこの町を訪れ、偶然にその場面を目撃した。

「警察には？」

「取り急ぎ近くの交番に伝えたがな。本気にしてくれたかどうか」
成人した男を連れ去る事件など田舎町の警官が信じるかどうか疑わしかった。

「じゃあ携帯で……」

「生憎ここは圏外だ」

杜斗は自分の携帯を取り出して示す。

「あっそうだ。俺の携帯とサイフ」

取られた事を確認して時弥は立ち上がった。

「！ おいっ止めろ」

杜斗の声をスルーして時弥は3人がいた付近を探し始める。

「あ、あった」

腰まで積まれたパレットの上に革のサイフと赤い携帯が乗っていた。のんびりと歩いてくる時弥を急かすように手巻きする。

「バカか！」

「大丈夫だって」

しれっと言い放つ時弥に杜斗は呆れて頭を抱えた。

＊あらあなたって……

「あー俺のバッグが無かった。どこにやったのかな」

「とりあえず民間人はむやみに動くな」

「え……？」

青年の言葉に時弥ときやは思わず聞き返した。

「……」

そしておもむろにサイフを取り出し中からカードを抜いて見せる。

「！？ お前も？」

つい張り上げた声に杜斗もりとは慌てて自分の口を塞ぐ。辺りを確認したあと声を殺して続けた。

「しかも俺と同じじゃないか」

「あ、そうなんだ」

時弥は今年、自衛隊に入ったばかりの新人である。

「ていうか、なんでサイフに入れてんだよ」

「丁度その時はお金が無かったんだ」

多くの自衛官・自衛隊員は隊内の売店で販売されている隊紋章入り専用パスケースを使っている。

買おうとした時に買えないと買うチャンス逃す。というパターンである。

「とりあえず出るぞ」

杜斗は守る必要の無い相手だと解り次の行動に移った。気配を探りながら外に出る。

「わ……ホントに山の中だ」

「ここは農家の倉庫だったようだな」

見渡すとあちらこちらに倉庫や家屋が点在していた。

「！　そういえばどうやって追いかけたの？」

同じ旅行者なら乗り物は無いハズだ。

「警官に身分証見せてバイクを借りた」

そんな事が許されるのかどうかは解らないが……とにかくあの時に考えられるだけの事を考えて出た結論がそれだったらいい。

「昔のドラマで刑事がやってた事を堂々とやったんだね」

「遠回しに皮肉並べてんじゃねえよ。それとも何か。あのまま放っておいた方が良かったか？」

「いやいや、それはそれで困るよ。1人で解決させるのはしんどそうだし」

「だったら文句言ってるな」

警戒しながら近くの森に身を隠す。

「警官、来ると思う？」

「……」

時弥は問いかけてみたが杜斗は目を据わらせて少し口角を上げた。彼も時弥と同様に自分たちで解決するしか無いと思っているようだ。

「お前、車の中をのぞき込んで捕まったんだよな」

「うん」

「何が見えた」

「なんにも」

その応えに頭を抱える。

「何か見とけよ」

「無茶言わないでよ」

しばらくの沈黙――

「ねえ」

「なんだよ」

「彼らの服装、気がついた？」

「ただのミリタリーマニアだろ」

「どっちかっていうとファッションだと思うけど」

「だったらなんで訊いた……」

「ああごめん、服装じゃなくて装備」

「装備……？ ああ、改造モデルガンか」

男3人は腰のベルトにヒップホルスターを装着しハンドガンを納

めていた。因みにホルスターとは拳銃を納めるケースの事である。

杜斗と時弥はあれが改造モデルガンだとすぐに気がついた。

「何するつもりなのかなぁ？」

「それが解らないから動きようがねえんだろぅが」

「あ、戻ってきた」

「!？」

◆思ったよりも大変でした

時弥ときやが捕まっていた倉庫が見渡せる位置で隠れていた杜斗もりとたちは、男の1人が倉庫の中に入っていくのを確認する。

見ていると――男が慌てて出てきた。

「おい！ 逃げたぞ！」

声を張り上げて仲間を呼んでいる。

「ホントかつ！？」

1人が駆け寄ってくる。髪を茶色に染めた青年だ。

「どこに逃げやがった……」

最後の青年が確認のために倉庫に入って出てくる。

「まさか山を下りたんじゃ？」

「歩いてか？ 町までかなりあるんだぞ」

「俺が確認してくる」

1人がそう言って側にあった軽トラに乗り込んだ。

「あ、あの軽トラ動くんだ」

時弥が呑気に感心する。

「あいつら……ガキの火遊びじゃなさそうだ」

「え？」

杜斗がつぶやき、彼が見つめた先に視線を移す。

「うそ……」

そこには別に2人の男がいて、その男たちに挟まれるように1人の少女が震えて立っていた。

後ろ手に縛られている事が窺える。

「あちゃ……」

「こいつはまずいな」

どうやら思っているよりも大きな事件になりそうな予感がした。

*マジですか

「今1人が車で降りた。新たに2人加わって今の処は計5人か」

「あんまり増えるとシロウト相手でも2人じゃしんどいね」

しかも時弥ときやと杜斗もりとは自衛隊に入隊したばかりだ。自己でトレーニングしていたとはいえ不安が募る。

「誘拐かなあ……」

「5人で行っているのが気に掛かる」

金目的ならそれだけ分配されるメリットがなくてはならない。それ以外なら……？

「……」

2人は考えるが思いつかない。

「とりあえず情報が欲しい」

「うん」

杜斗は同意した時弥をじっと見つめた。

「え……なに？」

「お前、もっぺん捕まってこい」

「へっ!？　なんでそうなの」

のほほんとしていた時弥もさすがに目を丸くする。

「情報取ってこい」

「ちよっ……まっ……わあっ!？」

考え直そうよ。という時弥を蹴り飛ばした。

「!」

べしゃ!　と音がして男たちが目を向ける。

「あ!　てめえ!」

茶髪の男が駆け寄ってきた。

「いいか、俺の事は絶対に誰にも言うんじゃねえぞ」

杜斗は時弥にしか聞こえない音量で発して身を隠す。

「あたた……。!」

頭を押さえている時弥に茶髪はモデルガンの銃口に向けた。

「やっぱそうなる？」

時弥は薄く笑って立ち上がり肩の高さまで手を挙げた。

「そいつが自衛隊ってやつか」

「はい」

鋭い眼差しで時弥を見据える男。少女の左にいた男だ。20代後半だろうと見受けられる。

「……」

自衛隊員なんだけど……と時弥は心の中だけで突っ込んでおいた。少女は体を震わせて涙目で顔を伏せている。どこかのご令嬢なのだろうか、少し高そうなワンピースにコートを合わせた恰好だ。

「こいつと一緒に閉じこめておけ。今度は逃がすな」

「は、はいっ」

えんじ色のスーツを着こなしているその20代後半の男が茶髪に言う。茶髪と他の2人も背筋を伸ばして応えた。

「……」

パシリかなんかかな？ 時弥は気づかれないように目をキョロキョロさせて辺りを探る。しかしすぐ両手を後ろで縛られて背中を乱暴に突かれ再びあの倉庫に促されるのだった。

*思案中

「……」

その様子を見ていた杜斗は冷静に分析する。

少女を連れてきた男2人は20代後半くらいだろう。ガキ3人が慕っているようだが暴力団系とも違うようだ。

「慕っている」といえば聞こえは良いが、どちらかと言えば「使われている」に近い。

杜斗は小さく唸った。

あの3人だけならさして問題ではなかったが……あの2人には少し注意が必要だと感じた。少なからず、まったく闘い慣れしていない訳でもなさそうな感覚がある。

とはいえ日本での闘い慣れなど知れている。相手が本物の銃を持っていたとしても勝てる自信が杜斗にはあった。

そんな自信が何故、彼にはあるのか——実は杜斗は10歳頃までアメリカで暮らしていた。友人の父親が米軍の兵士で杜斗に戦闘のノウハウを教えていたのだ。

「格闘技や体力はあとから鍛えればいい」

そう言って杜斗に色々な戦闘や格闘の技を教えていた。もちろん彼のためではない。単に自分の知識をひけらかしたかっただけだ。

ある意味、はた迷惑な話だが杜斗は従順にその学びを吸収していた。そうして日本に帰国し今は自衛隊に入隊している。

帰国子女は異性にモテる。が杜斗は愛想の良い性格ではない。アプローチする女性に優しくなど出来るハズもなく、大抵は嫌われて終る。

別に自分からすり寄った訳でもないのに嫌われるというのは押し売りに近い。

話が逸れた感はあるが……とにかくにも杜斗の自信は単なる勘違いや思い込みではない事だけは解っていたただけだろうか。

「大丈夫？」

「……うん」

少女と一緒に倉庫に閉じこめられた時弥は気遣うように声をかけた。冷たいコンクリートの床に毛布を敷いてその上に2人は両手を後ろ手に縛られてまとめられている。

15、16歳ほどと思われる少女は肩までの黒髪を緩くカールしていて大きめの瞳は可愛く潤んでいる。

「俺、時弥」

「あたし……理絵^{りえ}」

「理絵ちゃんか。怖がらなくていいよ。きっとなんとかなるから」

「うん……」

理絵はか細く発して頷いた。

本当はもう1人仲間がいる事を教えて安心させてあげたかったが、いつどこで彼らに知られるか解らない。

心苦しいが杜斗の事は伏せておく事にした。

「理絵ちゃん」

「はい」

「捕まった理由は解る？」

優しく問いかけると少女は少しからだを強ばらせる。捕まった時の事でも思い出したのだろうか、瞳の潤みが増した。

「きつとパパのお金だと思う」

「！ 君のお父さんは何をしてる人？」

「IT企業の社長してるって……」

詳しい事業内容は解らないのだろう。まあそんなものだ。時弥は納得付けて続ける。

「いつ捕まったか解る？」

「昨日……ショッピングに行こうとして歩いてたらいきなり後ろから」

「そか。怖いこと思い出させてごめんね」

無言で首を振った少女から視線を外して聞いた事柄を整理する。

歩いていったって事は今までそんな危険は無かったという事だから大きな会社じゃないのかな？ IT企業っていうのは最近、知名度の上がってきた業種だから金持ちが多いと思われがちだ。

しかし実際は他の中小と変わらない企業がほとんどである。見た処、少女はブランド物に身を固めている訳でもなさそうだし。

誘拐した彼らの勘違い？ と、あの3人だけならそう思えた。

しかしスーツの2人がいる事でその予想は見当違いな気がしてならない。

「俺そんなに頭良くないんだよねえ……」

「え？」

「独り言」

とりあえずまあ。この情報をどうやって杜斗に知らせるか……

「やっぱ」

抜け出して教えるしかないよね。時弥は口の中で発した。

◆夜間行動

「ちょっと抜け出すけど心配しないでね。絶対に助けてあげるから」
「え？」

首をかしげる理絵から視線を外し考えるように目を上に向けて後ろ手をゴソゴソとする。

「うん、これなら外せそう」

前の時はちよつと混乱してたから上手く出来なかったけど……と言った時ロープがパラリと解けた。

「!？」

声を出しそうになった少女に無言で自分の口の前に人差し指を立てて声を制止する。

このまま理絵ちゃんのロープも解いてあげたいけど2人で逃げるのは今は避けた方がいい。時弥ときやはそう考えて再度「必ず助けるからね」と言い残し警戒しながら倉庫をあとにした。

「えーと……杜斗もりとはどこかな？」

キョロキョロしていると微かに声が聞こえる。

「おいっこっちだ！」

傾きかけた太陽の下、山の中から手招きする人影があった。

*天然

「なんだよ。まだそれだけか」

聞いた杜斗は呆れるように発して腕を組む。

「あ、酷いな」

「おいっまた逃げたぞ！」

そんな声が倉庫の方から聞こえて2人は互いに顔を見合わせた。

「うきゅ！」

「！　いたぞっ！」

変な声が聞こえて茶髪がそちらを見ると、山の切れ目につっぷしている時弥を見つける。

「まったく……逃げるんじゃないよ」

「いやゝなかなか逃げ切れないねえ……あっはっはっ
薄笑いで小さく笑う。

杜斗め覚えてろよ……と心の中で涙を流した。

「君、優しそうなものになあ」

「え……？」

腕を掴んで倉庫に促す茶髪に時弥はぼそりとつぶやく。

「知ってる？　自衛隊ってね1人も殺してないんだよ」

「なんだよ突然……」

「人を助けるための軍隊。それが自衛隊なんだよ」

もちろん軍隊と認められている組織ではない。呼称が必要であるが故の言葉である。

「……」

ニコニコと笑う時弥を見つめて茶髪は怪訝な表情を浮かべた。

「こんな状況でよくもそんな事が言えるよなあんだ」

「こんな時だからこそさ」

これは現実逃避じゃない。次の行動に移せるための余裕を生み出

す行為だ。悩んだり焦っても打開策は見いだせない。

「そろそろ夜か」

倉庫の入り口から見えるコンクリートの床に時弥はぼそりとつぶやいた。さすがに今日中には解決しなかったか……小さく溜息を漏らす。

「怖いよ……」

少女がか細くつぶやいた。

薄暗くなった倉庫に茶髪がランタンを置いていったが、その明かりはとても安心出来るようなものではない。

時弥は震える少女を見つめてニコリと微笑み口を開いた。

「夜っていうのは怖くないよ」

「え？」

「だって……」

安らかな眠りを誘うものだもの。静かにそう発して再び笑う。

「ほら、敵をたたく時って夜間なんだよね。それって視界がハッキリしないからなんだけど……。ハッ!？」

言いながら途中で気がつく。いま話してる事ってむしろ怖がらせることなのでは……

「……」

ちらりと少女を見下ろすと案の定、先ほどよりも震えている。

「あちゃ。ごめんごめん」

女の子っていうのはどうも扱いにくいな。と時弥は困りながら縛られている後ろ手を動かした。

家族に姉がいるが彼の姉は少し変わっていた。時弥が自衛隊に入ったのも姉の影響だと言っている。

男と女では同じ鍛えた者同士である場合は絶対的に男性が強い。そんなコンプレックスを持つ姉は何故か物心ついた時弥を鍛え始めた。

恋人が出来るまでのボディガード的な役割をさせようと考えたの

だ。5つほど年の離れた姉だがそのトレーニングは本格的で時弥は姉の教え方が上手かったのか近所の暴走族、数人にも勝てるほど腕を上げていた。

そんなおかげで暴走族や暴力団からの誘いが頻繁になり……先にキレたのは姉だった。

「あたしの大事な弟をそんな処にやれますか！ あんた自衛隊に入りな！」

「はい……？」

普通、レールは親が敷くものだ相場が決まっているものだが時弥に至ってはレールは姉が敷いた。

特に行きたい進路も無かった時弥はそのまま自衛隊の門を叩いたという訳だ。

索敵一さくてき

「それくらい夜は安心するって事だよ」

苦しい持って行き方だが理絵は時弥ときやの笑顔に安心したのか小さく笑った。

「！」

少女が時弥の胸に寄りかかる。

ラッキー！ と思いたいが顔立ちがどこことなく姉に似ている気がして時弥は素直に喜べなかった。

そんな姉も今では結婚を前提に付き合っている彼氏がいる。彼氏の趣味はサバイバルゲーム……時弥をいつも誘っては負け続けている。

姉の見方は正しかったとも言えるのかもしれない。

「……」

暗がりの中、杜斗もりとは倉庫の近くにある灯りの点いた家を見つめる。男たちはあそこに集まっていると見たが……

「忍び込むのもう少しあとだな」

それまで仮眠といくか。と杜斗は草の生えた地面を確認して寝転がった。多少ごつごつして背中が痛い但我慢しよう。

木々の隙間から見上げる空には星が瞬またたいていた。星座なんか知りもしない杜斗だが、昔の人はそこに神々の伝説や想いをはせたのだろうと目を細める。

「とりあえず俺によっかかっていいから眠った方がいい」

「……でも」

時弥は言い聞かせるように少女に発した。戸惑う理絵に付け加える。

「いざとなった時に動けないと困るでしょ？ そのために体力を温

存しないよね」

「うん……」

理絵は納得して時弥に寄りかかり目を閉じた。寝付けないのだろう、いつまでももぞもぞと体勢を何度も直している。

「大丈夫。きっと助かるよ」

「……うん」

聞こえないほどの声で少女は頷いた。

数時間後——杜斗がむくりと起き上がる。

「……10時か」

腕時計のライトを付けて時間を確認してつぶやく。あと数時間は待ちたいが……さすがにもう眠れない。

杜斗は小さく溜息を吐くと立ち上がって灯りの点いている家を確認する。警戒しながら山を出て家に向かった。

考えたら俺よりあいつの方が小さいんじゃないか。顔をしかめてぼそりとひと言。

「戻すべきじゃなかったか？」

今更、言っても仕方がない。大きな体を揺らして杜斗は足音を立てずに駆けた。

武器が1つも無いというのは心細い。そこら辺に落ちている角材でも持っていようかとも考えたが動きが制限されるのも避けたい処だ。

とりあえず今は忍び込んでいる最中なので余計な事は考えない事にした。

◆気にするな

建物は一般的な日本家屋だが3階建てだ。灯りが点いていたのは2階部分。外から確認した時点ではテレビが付いているのだと窺えた。

「……」

裏口のドアノブを掴んで回す。すると抵抗もなく回った。音を立てないようにドアを開き静かにのぞき込む。

家の中は暗く、ひっそりとしていた。奴らテレビに夢中なのか？ 杜斗は眉をひそめて侵入を開始した。

靴のまま上がり暗闇の中、時計のライトを前に向けて進む。

「！」

警戒しながら進むとぼんやり明るくなっている処が見えてきた。どうやら2階全体には灯りが点いているらしい。

「……」

明るい2階を見上げて階段を上がる。

徐々にテレビの音が大きくなってきた。さほど頑丈とは思えないドアの隙間から中をのぞき込むと、バラエティ番組だと思われる声が耳に届く。

テレビの前にソファがあり、そこにスーツの男2人が腰掛け両端にある1人掛けソファにそれぞれ青年2人が座っている。

あとの1人は立ってテレビを笑って見ていた。その青年の腰にはやはりモデルガンがヒップホルスターに納められている。

細い隙間からではその改造モデルガンの良し悪しが付きかねて杜斗は口の中で小さく舌打ちした。

他に武器は無いか杜斗は見える範囲から部屋の中を見回す。

「！」

部屋の角に立てかけてある改造モデルガンに目が留まった。それはハンドガンではなくライフル……杜斗は再び舌打ちする。

一通り確認して音を気にかけて階段を下りていく。

「どういんだ？」

思案しながら家をあとにした。

*実は脱がなくても凄いんです

空が明けてゆく——時弥ときやは静かに目を開けて薄暗い外を見つめた。
「……」

胸の中で眠っている少女の頭を見下ろす。

このまま相手の人数が変化しないなら行動に出てもいいかもしれない……多少の怪我はやむを得ないだろう。

寝ていたので体はまだちゃんと動かない。仕掛けるなら昼間か。

「ン……」

「！」

そんな事を考えていると少女が目を覚ました。

「おはよう」

「あ、おはよう」

縛られて倉庫にいないければ普通の挨拶だ。否、時弥の笑顔が縛られている事など忘れさせてしまいそうなほど爽やかなのである。

「よく眠れたかな？」

眠れる訳がない。

「……」

理絵は言い出せずに苦笑いを返した。

「自衛隊にいるって、どれくらい？」

「まだ入ったばかりだよ。新人もいいトコ」

肩をすくめる。

少女はそれに残念そうな顔をした。期待はずれだと思っているのだろう。当たり前と言えば当たり前だが。

脱ぐと凄いが今の見た目では強そうには見えない。

少女の感情が見て取れて時弥は少しムツとしたが、強そうに見える相手に警戒されても困ると思う今の見た目に感謝しておく事にした。

言っておくが悪くない見た目である。単に「強そうには見えない」

というだけだ。

「……」

ていうか……時弥はふと考えた。

杜斗はいつ行動に出るんだろうか？ その処は打ち合わせしていない。捕まってる手前、俺からの行動は出来ないよね。じゃあ向こうの行動待ち？

「どうしたの？」

何か考え込んでいる時弥の顔をのぞき込む。

「！ ああ、ごめん。なんでもない」

心配させないようにニコリと笑う。その時、3人の青年が時弥たちに向かって歩いてきた。

「女、来い」

「え？」

理絵はびくりと体を強ばらせた。「どうしてあたしだけ？」という顔をして近づいてくる男を見上げる。

「ちょ、ちょっと待って……どうして彼女を？」

「うるせえ！ おまえには関係ないんだよ」

なんとか止めようとした時弥の肩を蹴る。

その途端——時弥はカッとなった。目が据わって無表情になる。

「！？」

青年3人はスツと立ち上がる時弥にギョツとした。手足をロープで拘束していたハズなのにそれらは床に投げ捨てられている。

「な……？」

両耳ピアスに無表情のまま近づき逆手に青年の手を掴んでキレイに投げ飛ばした。

「ぐえっ！？」

受け身の取れない投げ方をされてしこたま背中を打ち付ける。

「なっ、なんだてめえ！」

茶髪が驚いて改造モデルガンをヒップホルスターから抜く——が、その手首を掴み上げまたも投げ飛ばした。

「ヒッ……な、なんだよおまえ」

残った青年は少女の腕を掴んだまま引きずるように後ずさりする。

「彼女を離せよ」

無表情な瞳で言い放ったその口元は少し吊り上がっていた。

*後退

「!」

杜斗は倉庫の様子に変な事に気がつく。

「……? なんだ?」

目を凝らすと、男が少女を引きずるように出てきた。何かを凝視しもって背後から出てくる。

「? 時弥?」

今までとは違った雰囲気の時弥が男を見つめ追い込むように姿を現す。

「何やってんだあいつ……」

一瞬、別人かと思うほどに時弥の容姿は一変していた。

「早く離せ」

「くっ来るな!? 来るなよっ!?!」

半泣き状態で叫ぶように青年は発する。

「……っ」

さすがの理絵もこれには声が出ないようで、引きつった顔を時弥に向けていた。

遠目で見っていた杜斗はぼそりと……

「あいつ。豹変するタイプなのか」

少し感心するようにつぶやいた。

「! ……感心してもいられんな」

杜斗の左の視界に入ったスーツの男は、すでに改造モデルガンを懐から抜いている。

「! いや……あれは本物だ」

青年たちの持っているハンドガンとは違い、スーツの男が持っているのは本物らしかった。

「ご丁寧に消音器^{サイレンサー}まで付けてやがる」

助けに出るべきか？ 杜斗は決めあぐねた。

「!? わあっ!?!」

足下に甲高い音が響き時弥は驚いて両手を挙げる。

「死ねよ」

藍色スーツの男が言いながら引鉄^{ひきがね}を引いた。

「きゃあ!」

時弥は慌てて山に向かって駆け出した。

「待て!」

「わああー!」

待てと言われて待つ奴なんているもんか!

時弥は半ば^{なか}パニック

状態で木々の中に飛込んだ。

「出てこい!」

「……」

出てこいと言われて出て行く奴もないもんね。時弥は両手で口を塞ぎ木々の合間から見える男と青年の影を見つめた。

「どうしますか?」

銀色に輝くドクロのブレスレットをしている青年が男に問いかける。藍色スーツの男はしばらく考えて……

「放っておけ。おい! お前が逃げたらこの女の命は無いと思え!」

山に向かって大声で発し少女を連れて家に入っていた。

「……はあ」

気配が遠ざかった事を確認して時弥は深い溜息を漏らした。

瞬間——脳天に衝撃!

「いてえ!?!」

「何やってんだお前」

さすりながら振り向くと杜斗が目を吊り上げてそこにいた。

「あ……いやあゝはっはっはっ……」

気まずくて誤魔化し笑い。

「バカが」

溜息混じりに発し、苦笑いの時弥を見下ろす。

「怪我は無いか」

「え、うん」

それだけ聞くと杜斗は男たちが入って行った家に視線を向けた。

◆作戦会議

「どうしようか？」

時弥ときやは少し怖々と杜斗もりとに問いかける。やはり自分のしてしまった事に負い目を感じるためか恐縮した。

「さてな……」

怒っているのかいないのか……計りかねる表情だ。

「彼女……大丈夫かな」

「……」

時弥の言葉に苦い表情を浮かべる。

「ハッ!? まさか変な事するためにつれてったんじゃない?」

「! おいっやめろ」

慌てて出て行こうとする時弥の腕を掴んで制止した。

「だって……っ!」

「やるつもりならお前の目の前でやってる!」

「!」

「解ったら黙ってろ」

シュン……となった時弥を一瞥し建物に目を移す。

「!」

そこに1台の黒いリムジンが横付けされた。

「なんだろ……?」

時弥は首をかしげて出てくる人間を眺める。

「普通の民間人じゃなさそうだ」

杜斗は眉をひそめて応えた。

止まった車はまず30代のグレーのスーツを着た男が助手席から出てきて後部座席の右側に周りドアを開く。

そこから現れたのは恰幅かっぷくの良い黒いスーツを着た50代ほどの男。周りを睨み付けるように見回し白髪交じりの短髪を整えるようになでつけて不機嫌そうに建物に入っていた。

「今ので何人？」

「初めに3人、次に2人。今で3人だから合計8人だ」

「わくなんだか愉快になってきちゃったよ」

「バカ3人は数に入れなくてもいいかもしれない」

「！ ああ……そうかも」

いざ戦いになった時、あの3人の青年が機敏に動けるとは思えない。

「じゃあ、2人を倒すのが先決かな」

「今来たグレーと藍色もやるようだが、黒は問題外だろう」

「どうやって理絵ちゃんを助け出すかだね」

「とにかく、あそこのグレーをやるぞ」

リムジンを守るように残ったグレーのスーツを着た男1人をあごで示す。

「じゃ、俺は前から」

時弥は言って音を立てないようにゆっくり離れていった。

「！」

その様子に杜斗は感心する。

「サバイバルゲームでもやってんのか？」

ぼそりとつぶやいて時弥の背中を見送った。

*戦闘開始

「……」

時弥が所定の位置に付いた事を確認し互いに無言で頷く。

様子を窺っていると男はタバコを吸ったあと苛つくように足下に捨て革靴で踏んづけた。溜息を吐いて家の向こうに見える木々に視線を泳がせる。

「！」

今だ！ 杜斗は一気に山から飛び出す。

「！？ なんだきさ……ぐはっ！？」

言い終わらないうちに時弥が男の背後を取って跳び蹴りを食らわせた。

「はい、大人しくしてね」

「……やる事がえげつないなお前」

大きな声を出される前に相手を叩くのは当り前だが、まさか跳び蹴りを食らわせるとは思わなかった。

杜斗は呆れながら手際よく物色して武器を奪い縛り上げている時弥を見下ろす。

「とりあえず1人だね」

杜斗に武器を渡し手をはたきながら立ち上がる。

「ハッ！？ もしかして……」

「ん？」

何かに気づいた時弥は顔を青ざめた。

「あのおっさんに変なことさせるために理絵ちゃんを……！？」

「だから待って！」

家に向かって走ろうとした時弥の首根っこを掴む。

「お前の考えは短絡的すぎる！」

「だってえ……」

「とにかくだ。こいつをどっかに隠せ」

「了解」

2人は肩と足をそれぞれ持ち上げて男を運んだ。とりあえず近くの倉庫の奥に押し込む。そして再び山の中に隠れて様子を窺った。

「！ おいつ高瀬？」

出てきた藍色スーツの男は仲間がいない事に気がついて呼びながら辺りを見回る。

「どこに行ったんだあいつ……。ぐぎゃ!？」

時弥は再び背後から忍び寄り跳び蹴りをお見舞いした。

「……他のやり方ないのかよ」

「これが一番、効果的な」

そうだろうな。完全にのびてるぜ……と杜斗は目を据わらせて気絶している藍色スーツを見下ろす。

同じように縛り上げ倉庫の奥に押し込んだ。そしてまた山の中に隠れて様子を窺う。

*ピンチかもしれません

「！ 高瀬？ 崎村？ どこに行きやがった」

えんじ色のスーツを着ている男はキョロキョロと辺りを見回した。
「！？ なんだてめえっ」

「あ、しまった」

今度も跳び蹴りしようと駆け寄った時弥だったが、技をかける前に振り向かれてしまい立ち止まる。

「あのバカ」

杜斗は頭を抱えた。

「どうした！？」

えんじの声で他の男たちも建物から出てくる。

「あっおまえ」

ピアスが時弥を指さした。

「やあ。お元気？」

にっちもさっちもいかず時弥はニコリと笑う。

「なんだこいつは？」

黒スーツの男は顔をしかめて時弥を見定めるように見つめた。

「こいつですよ。言ってた自衛隊のやつって」

「！ 理絵ちゃん」

茶髪が黒スーツの後ろから少女を連れて現れる。

「なるほど」

黒のスーツに身を包んでいる老齢の男はそう言って口の端を吊り上げた。

「向こうから出てきてくれた訳か」

下品な笑みを浮かべると、えんじスーツが懷ふところからハンドガンを出して時弥に向ける。

「うへ……」

さすがにこれはピンチ。

と思った刹那——銃声が響き渡り、えんじスーツはハンドガンを持っていた腕を押さえていた。

「はら……？ あ、杜斗」

「世話やかせんな」

出てきた杜斗の手にはハンドガン。先ほど縛り上げた男たちから奪っていたものだ。

「お前らも動くなよ」

「くっ……仲間がいたのか」

苦々しい表情で杜斗を黒スーツは睨み付ける。

「武器を捨てろ」

「くそ……」

茶髪とピアスとドロブレスレットが改造モデルガンを放り投げた。それを見て時弥は安堵の溜息を漏らす。

「なんとなく事件解決？」

時弥が発した瞬間——銃声が空に響き渡った。

「え……？」

「ぐっ……」

気がつけば目の前に杜斗が立っていた。

◆真相の裏側

時弥は腕を押さえて足をふらつかせている姿に目を丸くする。

「杜斗^{もりと}!?!」

右腕から流れている血に驚いて駆け寄る。

一体どこから撃たれたんだ!? 周りを見回した。すると……

「まったく。大人しくしてればいいのに」

思ってもみなかった声が聞こえて呆然と少女に目を移す。その手にはハンドガン。

「理絵ちゃん……?」

「予想外だわ。新人だって言うから軽く見てたのに」

状況が掴めずに時弥はただ少女を見つめるしかなかった。

「どういう事……?」

「どうやら親玉はこいつらしい」

痛みに言葉を詰まらせて杜斗は理絵を睨み付ける。

「仲間がいるとは思わなかったわ。言ってくれなかったのね」

可愛い顔がまるで悪女のように歪んでいる。時弥は倒れそうになった。

「どうするんですか?」

茶髪が理絵に問いかけると少女は小さく舌打ちして杜斗と時弥を見やる。

「殺しているのはリスクが大きいわ。彼らにも共犯になってもらいましょ」

そう言うといえんじスーツがトランクを開けた。中に入っていたアタッシュケースを取り出して地面に置き開く。

「! 覚醒剤……?」

隠すようにして被せてあるスカーフの下から出てきたのは、ビニール袋に小分けにされている白い粉。それを1つ取り出しアタッシュケースを閉じたあとリムジンのダッシュボードから何かを出して

戻ってきた。

「……俺、それだけはやった事ないんだけど」

「俺だってそうだ」

2人は準備されているものにぼそりとつぶやく。

「大丈夫よ。打ってしまえば楽園に行けるわ」

「虚像の楽園だ」

薄笑いで杜斗が言い放つ。

「君たち、こんな事してていいの？」

「！」

時弥は3人の青年に目を向けて問いかけるように発した。

「うるさいわね」

「あんたに言ってるじゃない」

「！」

冷たく言った時弥に理絵はムツとする。

「覚醒剤がどれほど人を苦しめるものなのか知ってるのかい？」

「う、うるせえよ……」

「これは人を内側から破壊するものなんだ。人としての尊厳や権利なんか無視されるんだよ」

「だからなんだってんだよ……」

「時弥……」

杜斗は小さな声で時弥を呼んで目で合図した。

「！」

*極めろ！

「こいつ面倒ね。殺しちゃおうか」

理絵は笑いながら銃口を時弥に向ける。

「調子に乗るな！」

杜斗は一端、体勢を低くして素早く駆け寄り女のハンドガンを蹴り飛ばした。それと同時に時弥は黒スーツの腹を殴り他の3人も蹴り飛ばす。

「きゃっ!？」

理絵は驚いて手で顔をかばった。

しかし——時弥はグイッ！と理絵の右腕を掴み上腕部を両脚で挟んで固定し、同時に親指を空に向かせる形で相手の手首を掴み体に密着させた。

「いたたたたたた!？」

「悪い子にはおしおき！」

時弥は理絵に腕挫十字固^{うでひしぎじゅうじがため}を極めた。相手の肘関節を逆に伸ばして極めるアームロックの一種だ。

理絵はその激痛に左手でコンクリートの地面をバンバンと叩いて無意識に痛みを分散させようとする。

「——っ」

フラフラの黒スーツと青年たちは目を吊り上げて構えたが杜斗はそれを制するように発する。

「女の腕が使い物にならなくなってもいいのか？」

「なんだと？」

「このまま技を強めれば靱帯を痛めるか断裂する」
技をかけている時弥をあごで示した。

これは時弥と杜斗にとっては「賭け」だ。犯罪者に仲間意識などあるのかどうかは疑わしい処だが、共に行動してきた者たちには「連帯感」というものが生まれる。

それを刺激する事で、この圧倒的な数の差を乗り切ろうというのだ。

「……」

しばらくの沈黙が続く――

「！」

しかし、その耳に微かにサイレンの音が聞こえた。それは徐々に近づいてくる。

「この音……」

「警察車両のサイレンの音だ」

「！？ パトカー！？」

杜斗と時弥の2人以外は一斉に青ざめた。

「どうやら」

「助かったようだな」

時弥は技を緩めて微笑み、杜斗はそれを見下ろして同じように笑った。

*盟友？

「ご苦勞様です！」

制服警官が杜斗に敬礼する。

理絵たちは駆けつけた警官たちに手錠をはめられパトカーに詰め込まれた。

「杜斗！」

「！」

別々に事情を聞かれていた時弥ときやが心配そうに杜斗に駆け寄る。

「怪我は……」

「かすっただけだ」

ハンカチで縛られている腕を一瞥して応えた。

「俺を庇ってくれたんだよね……ごめん」

すまなそうにつぶやく時弥を見下ろし口を開く。

「別にお前のためじゃない」

「え？」

「たまたま動いた先で弾が当たっただけだ」

フン……と鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

「……」

時弥はポカンとしたが、杜斗はそういう人間なのだと小さく笑った。

杜斗は病院で傷の手当てをしたあと、警察でさらに事情を詳しく訊かれ同じく聴取を受けていた時弥と町をあとにする。

その後、あの事件について聞いた処によると……理絵という女性
は親の金で覚醒剤を買い、それによって利益を得ていたらしい。

昔と違い最近では暴力団関係に頼らなくても覚醒剤の取引が出来てしまう。ある意味、彼らは裏の社会の秩序を守ってきていた訳だ。
今ではそのタガが外れて黒い部分が表の社会にまで這い寄ってきて

ている。とはいえ、それが彼らの存在を容認するものであるのかどうかは疑わしい処だが。

時弥がのぞき込んだワゴンには、取引に使用する紙幣の入ったジュラルミンケースが乗せられていたのだ。

理絵が人質を演じたのは時弥の力と他に仲間がいなか探るためだった。

あの時——時弥がワゴンをのぞき込まなければ覚醒剤の取引は闇に隠れたままだったかもしれない。

その時——杜斗が時弥を見つけていなければ、彼は無事に生きて帰る事は敵^{かな}わなかったかもしれない。

偶然は必然なのか。はたまた2人の出会いはこの先の何かを予言しているのか……とにもかくにも事件は解決した。

警察署から出て駅に向かう道すがら、時弥は前を歩く杜斗に発する。

「一応、杜斗の言ってたこと、聞いてくれてたんだね」

「ん？ ああ……」

杜斗が派出所に駆け込み怒鳴るようにしてまくし立てながら自衛隊員証明書を見せてバイクにまたがり走り去ったあと、警官2人は顔を見合わせ考えあぐねていたがとりあえず自衛隊員に言われたのだからとパトロールした。

そうしてパトロールしている時に銃声が鳴り響き慌てて応援要請を行ったのだそうなの。

「遅すぎるんだよ」

杜斗は舌打ちした。

「まあ無事に解決したんだからいいじゃない」

時弥は呑気に言い放つ。

「これからよろしくね」

「なに？」

言われて杜斗は立ち止まり振り返った。

「だって同じ駐屯地なもの」

「……」

杜斗は応えずに顔を元に戻して再び駅に向かう足を進める。しかし心の中では複雑な心境だった。

こいつと同じ駐屯地……なんだか嫌な予感がしてならない。俺は無事に自衛隊員として生きていけるのだろうか？

駅のホームでかすれた雲の流れる空を杜斗は見上げた。

END

***盟友? (後書き)**

*うん、やはりアクション書くのは面白い(´・ω・｀)
この2人も好きになった。

読んでくださったあなたが少しでも笑えたなら私は幸せです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9159r/>

腕挫十字固ーうでひしぎじゅうじがためー

2011年8月30日03時24分発行